



中高生とともに差別と闘う

『徳島ラジオ商事件』

吉成タダシ（うずしおランチ代表）



おっちゃんく

今春、三十八年間勤めた学校教員を退くことにしました。学校を離れるに際し、思うことは多々ありました。この後どうしようか、のんびりしようか、旅行三昧でもしようかとか。でも、どれも今一つピタツとしなくて、やりがいを感じなくて、あらためて自分を見つめ直しました。そして、最期までやりたいことをやりたいなと思つたのです。それが、人権こども塾「数学教室」。自宅を改装し、専門である数学教室を開設し、来子どもたちに人権こども塾でも学んでもらおうと思ひ立つたのです。私も中学時代、数学塾に通っていました。ところがそこはちょっと変わった塾でした。「塾」とか「予備校」と銘打つことなく、「どこ？」と訊かれても、「おっちゃんく」としか言ひようがなかったのです。しかも、古びた自宅の一階和室二部屋を丸々使い、二十人くらいの同級生が座卓で黙々と問題集を解いていくのです。

塾の先生は、私からの見た目ではお爺ちゃん、初日に「先生と呼ばなくていい。おっちゃんいい」と話したことから、「おっちゃんく」となったのです。そして問題が解けなければ、「おっちゃん！」と呼ぶと隣に来て、新聞広告を四分割した裏面に書きながら解説をして教えてくれるのです。嬰鏢としていて、どこか威厳があり、畏れを抱きつつも、親しみや信頼を感じ存在でした。月謝が激安だったとも記憶しています。とにかく、不思議な塾でした。

そんな「おっちゃん」を、私が二十歳くらいのときにテレビで見かけたことがあります。それはそれはビックリしました。「えっ！なんで？ どういうこと？」ニュース映像に、大勢いるうちの一人として、よく見た顔があるのです。「富士茂子さん無罪」「何？ それ」でした。

徳島ラジオ商事件

一九五三年、徳島市で電器店主が殺害される。そのときの内縁の妻の富士茂子さんを犯人と断定。冤罪を主張し続けたにもかかわらず、裁判が続けられず懲役十三年が確定。服役の後、再審請求を繰り返すものの、六十九歳で死去。死後再審が開始され、一九八五年に無罪判決。

私が見たニュース映像は、その無罪判決が確定した瞬間でした。そんなことをまったく知らなかった私は、本当にビックリしたので「おっちゃん」は、富士茂子さんの弟さんでした。当時の私は、それでもこの事件について深く知ろうとはしませんでした。

一九九五年、当時放送されていたテレビ番組「知ってるつもり」で、この事件が取りあげられました。その頃の私は、ちょうど部落問題や人権問題に深く取り組み始めていたところで、食い入るように見たのを覚えています。そしてようやく事件の概要を知ることができたのです。地元のこと、ましてや極めて身近な、お世話になった人に関わることを知らずにいた自

分を恥じました。またその頃、当時の勤務校の人権学習の取り組みを取材にしていたテレビ局のディレクターの方から、開高健の小説「片隅の迷路」を紹介され、読んだことも大きな衝撃でした。

「おっちゃん」

「おっちゃん」は当時、事件についてふれることは一切ありませんでした。それは、何か心に強く決めていたのではないかと思います。贅沢もせず、慎ましく肅々と生活されていたように思います。そして私も今、人権を軸に数学教室を開こうとしていることを思うと、不思議なめぐり合わせを思わずにいられません。

とはいえ、入つてくれる子どもたちがいないと塾は成立しません。数学だけではなく、人権や平和、環境問題について学ぶような塾が受け入れられるのかどうか。この原稿を書いている段階でどうか。皆さんに読んでもらっている段階ではどうか。

「徳島ラジオ商事件」。私ですら、関心がなければ知りもしませんでしたから、より若い世代は、地元のことと言えども他人事。知りもしないでしょう。そのことも、関りのあった一人として、子どもたちに伝えていきたいと思ひます。小さくても少なくとも、いつか教室の門戸を叩いてくれることを心待ちにしたいと思ひます。

私にとっての学校

学校とはつくづく特殊な職場だと思ひます。いくら親でも、子ども同士や教師と生徒の間に築かれ

た絆、教室や部活での深いつながりは分らないと思ひます。それはそのとき、そこに居る者にしか分からない、形のない、感覚でしかはかりようのないもののように思ひます。

私が入を信じて待つことができようになつたのは、子どもらを持つ可能性を見せてくれたから。感情的に怒らなくなったのは、子どもらに打てば響くことを教えてくれたから。

毎朝届いてくる生活ノートを読むのが好きでした。私が文を書くことを厭わなくなったのは、この生活ノートがあつたから。

部活動で負けて悔しくてみんな走つて帰つたこともありました。子どもたちのハツと気づいたときに見せる、花が咲いたような満面の笑顔を見るのが好きでした。全力で悔しがれる姿が、全力でよろこぶ姿が好きでした。

人権学習で本音を語り合うなかで見せた涙。この仕事に就いてよかつた、心の底から思ひました。まだ誰も来ていない早朝の教室も、みんなが帰つたあとの放課後の教室も好きでした。

困難なこともたくさんありましたが、失敗もたくさんしてきまして。決して褒められるような人間ではありませぬ。それでも私は、今の自分のすべてをつくつてくれた学校という場所が好きです。今も当時のままの中学生が胸に居ます。そんな思ひ出のすべてに感謝の気持ちを含めて。

三十八年、ありがとう。